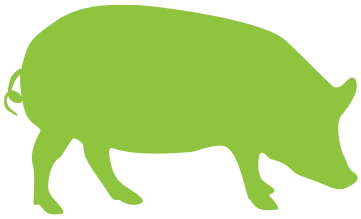
豚肉

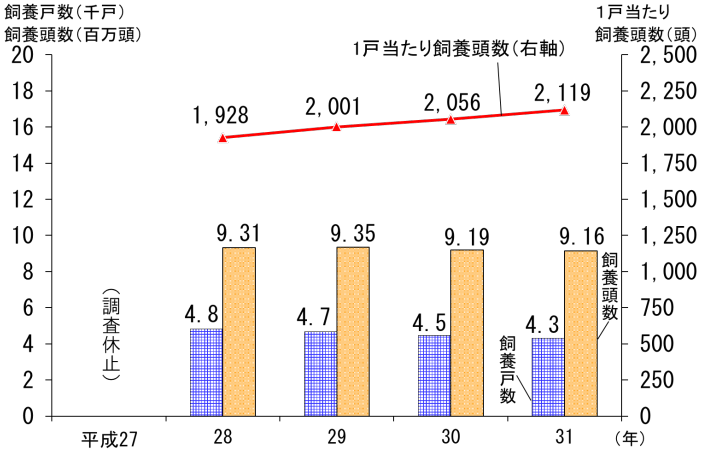


◆飼養動向

３１年２月現在の１戸当たり飼養頭数、前年比３．１％増

豚の飼養戸数は減少傾向で推移しており、平成３１年は、４３２０戸（前年比３．４％減）と前年からやや減少した。総飼養頭数は、近年おおむね減少傾向で推移しており、３１年は９１５万６０００頭（同０．４％減）と前年からわずかに減少した。１戸当たり飼養頭数は、前年から６３．７頭増加して２１１９．４頭（同３．１％増）となった。また、子取り用雌豚の１戸当たりの飼養頭数も同２０．３頭増の２４６．６頭（同９．０％増）となった。小規模生産者を中心として飼養戸数が減少したものの、１戸当たり飼養頭数は増加し大規模化が進行している（図１）。

図１　豚の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注１：各年２月１日現在。
２：平成２７年および令和２年は農林業センサス実施年のためデータなし。

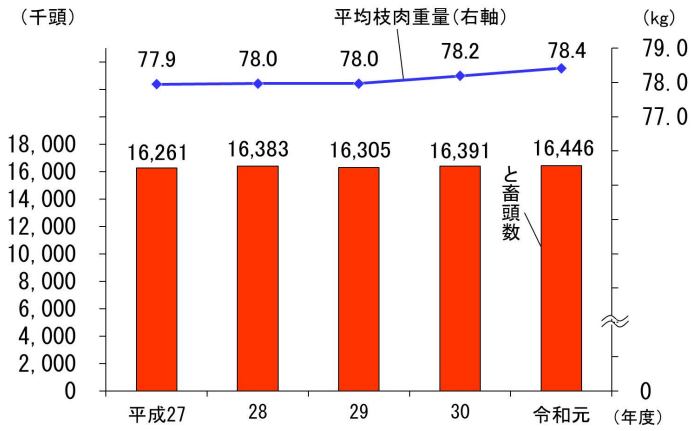
◆生　産

元年度の生産量、前年度比０．６％増

豚のと畜頭数は、平成２９年度に前年の夏場の猛暑による繁殖成績の低下などで減少したものの、近年はおおむね増加傾向で推移している。令和元年度は、前年夏の猛暑の影響による繁殖成績への影響から、同年５月下旬から６月に減少が見られたものの、年明け後は出荷頭数が増加し、１６４４万６２９４頭（前年度比０．３％増）と前年同月並みとなった。

また、同年度の１頭当たりの平均枝肉重量は、育種改良に加え、暖冬などから増体が進み、７８．４キログラムと前年度を０．２キログラム上回った（図２）。

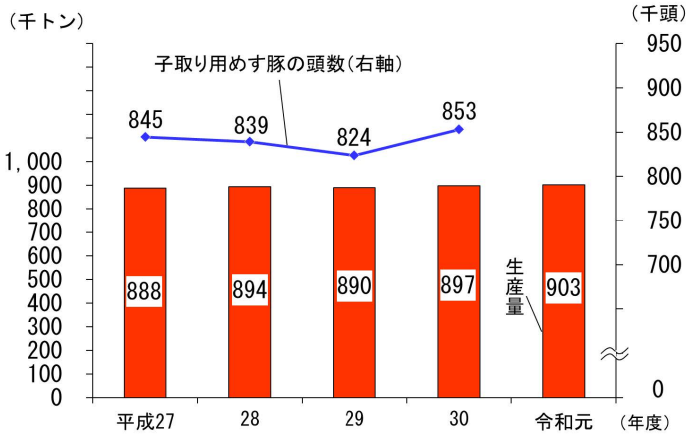
図２　豚のと畜頭数および平均枝肉重量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：平均枝肉重量は全国平均。

生産量については、夏場の暑さによる繁殖成績の低下などから出荷頭数が減少した２９年度を除き、畜産クラスター事業などの取り組みなどにより、おおむね増加傾向で推移している（図３）。元年度は、年明け後の暖冬や出荷頭数の増加などから９０万２９１９トン（同０．６％増）と前年度をわずかに上回った（図３）。

図３　豚肉生産量および子取り用めす豚の頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」
注１：生産量は、部分肉ベース。
２：子取り用めす豚の頭数は、各年度２月１日現在。令和元年度は２０２０年農林業センサス実施年のためデータなし。

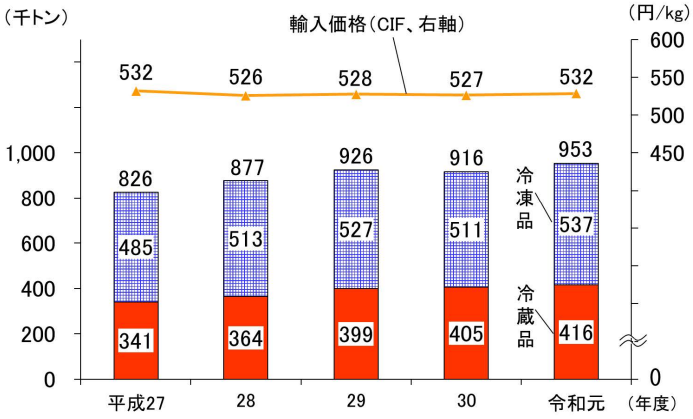
◆輸入

元年度の豚肉輸入量、前年度比４．０％増

豚肉

豚肉の輸入量については、国内の好調な需要を背景に、冷蔵品は、北米現地の高い輸出意欲などからおおむね増加傾向で推移している。冷凍品は、平成２６年度の日本国内でのＰＥＤの発生に伴い冷凍品輸入が急増した反動で、２７年の冷凍品輸入量が減少したことを除き、ＥＵ諸国からの輸入量の増加や、カットなど技術面の向上によりメキシコ産などの輸入量が増えたこともあり、おおむね増加傾向で推移している（図４）。

図４　豚肉の輸入量および輸入価格の推移

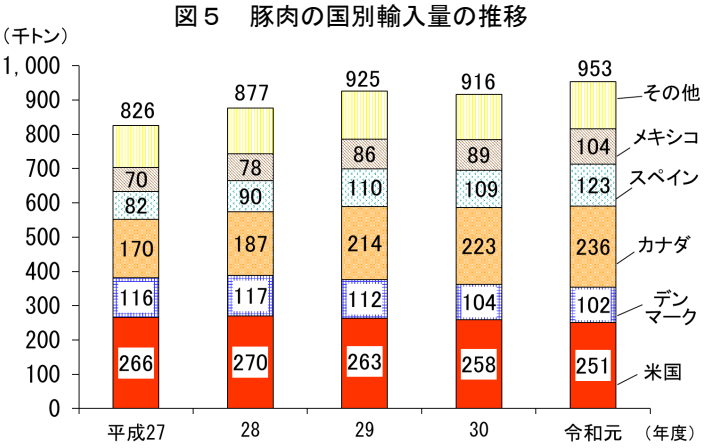


資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

令和元年度は、９５万３１１２トン（前年度比４．０％増）と前年度をやや上回った。このうち、冷蔵品は堅調な需要を背景に、４１万５６６３トン（同２．５％増）と前年度をわずかに上回ったが、冷凍品は、中国におけるアフリカ豚熱発生の影響により輸入先国の豚肉相場が上昇していたことを踏まえ、輸入業者が先高を見越して必要量を早めに手当てしたことなどにより５３万７４１９トン（同５．２％増）と前年度をやや上回った（図４）。

元年度の国別輸入量は、米国産が２５万１１９６トン（同２．８％減）、デンマーク産が１０万２４８９トン（同１．４％減）と前年度から減少した一方、カナダ産は２３万６２５５トン（同５．８％増）、スペイン産は１２万２８１２トン（同１２．２％増）、メキシコ産は１０万３７７２トン（同１６．１％増）と前年度から増加した（図５）。

図５　豚肉の国別輸入量の推移



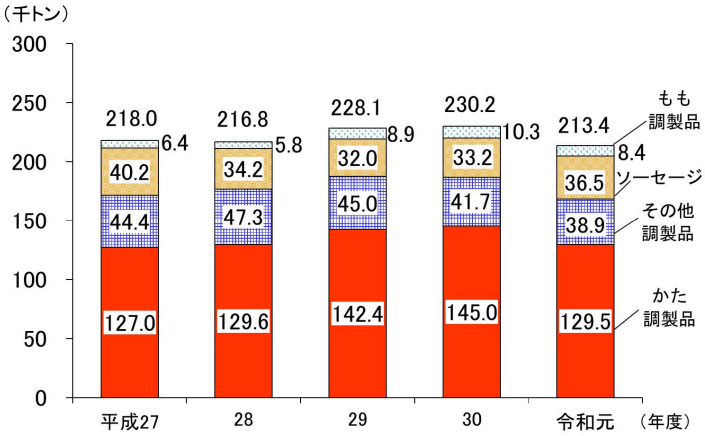
資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

豚肉調製品・ソーセージ

豚肉調製品やソーセージの輸入量については、底堅い需要を背景とし、現地相場の変動に伴う増減を繰り返しながらもおおむね増加傾向で推移している。

令和元年度は、ソーセージの輸入量は引き続き前年を上回ったものの、中国におけるアフリカ豚熱の影響により、主要輸入先国において豚肉相場が上昇していたことなどから、豚肉調製品の輸入量が前年を下回ったため、合計で２１万３３６９トン（前年度比７．３％減）と３年ぶりに前年度を下回った（図６）。

図６　豚肉調製品およびソーセージの輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注１：もも調製品：160241090（関税率 20%）。
　２：かた調製品：160242090（関税率 20%）。
　３：その他調製品：160249290（関税率 20%）。
　４：ソーセージ：160100000（関税率 10%）。

◆消費

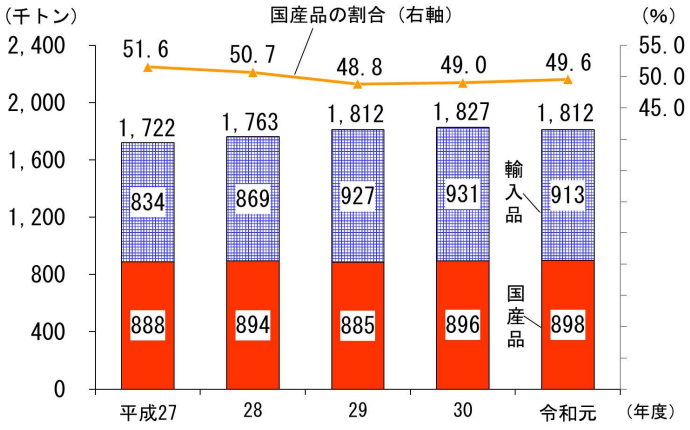
元年度の推定出回り量は前年度比０．９％減、家計消費量は同１．３％減

推定出回り量

豚肉の推定出回り量は、近年の好調な豚肉消費を背景に増加傾向で推移している。平成２７年度、２８年度は牛肉需給の引き締まりを受け、豚肉の需要が増加し、その後も肉ブームなどを背景に好調に推移した。

令和元年度は、国産品は８９万８２４５トン（前年度比０．２％増）と前年同月並みとなり、輸入品は９１万３３０５トン（同１．９％減）と前年度をわずかに下回った。この結果、全体では１８１万１５５０トン（同０．９％減）と前年度をわずかに下回った。なお、合計に占める国産品の割合は４９．６％（同０．６ポイント増）となり、２年連続で前年度を上回って推移している（図７）。

図７　豚肉の推定出回り量の推移

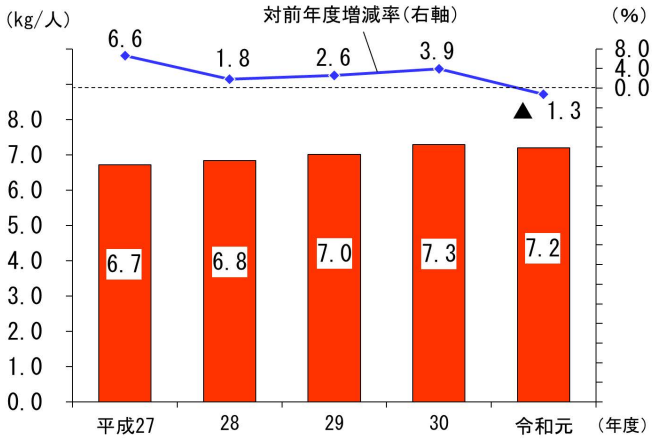


資料：農畜産業振興機構推計
　注：部分肉ベース。

家計消費

豚肉消費の約５割を占める家計消費について、年間１人当たりの豚肉の家計消費量を見ると、家庭における好調な豚肉需要を背景に近年は増加傾向で推移していたものの、令和元年度は、国産豚肉の相場高に加え、改元に伴う１０日間にわたる大型連休の中、ハレの日のごちそう食材として需要が牛肉に流れたことなどから、元年度は、年間１人当たり７．２キログラム（前年度比１．３％減）と５年ぶりに前年度を下回った（図８）。

図８　豚肉の家計消費量（年間１人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

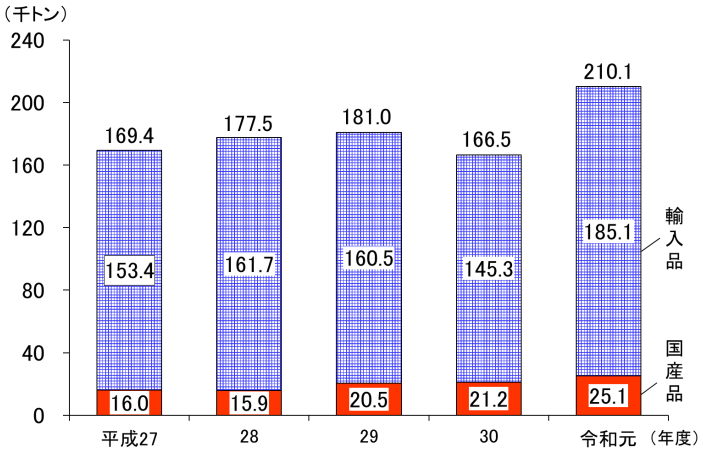
◆在庫

元年度の推定期末在庫量、前年度比２６．２％増加

豚肉の推定期末在庫量については、約９割を輸入品が占めており、そのうち９割強を冷凍品が占めている。このことから、推定期末在庫は輸入量や生産量の影響を受け、増減を繰り返しながら推移している。

令和元年度は、国産品は生産量の増加などにより２万５０６２トン（前年度比１８．１％増）と前年度を上回り、輸入品は、中国におけるアフリカ豚熱の影響に伴う輸入量の増加などにより、１８万５０７５トン（同２７．４％増）とともに前年度を上回った結果、合計では２１万１３７トン（同２６．２％増）と前年度を大幅に上回った（図９）。

図９　豚肉の推定期末在庫量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注１：部分肉ベース。
　２：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

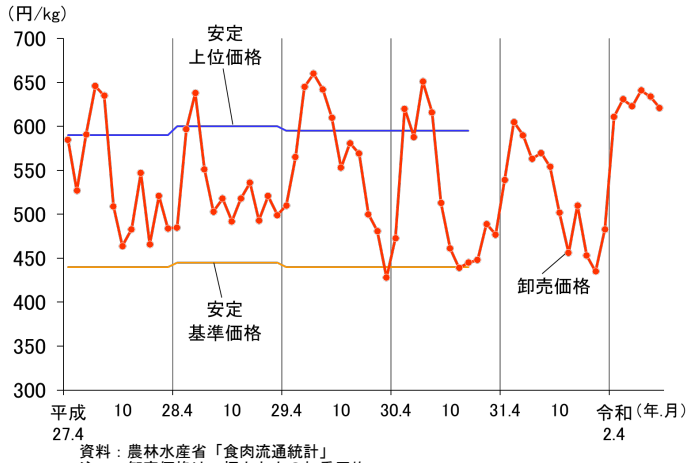
◆枝肉卸売価格

元年度の枝肉卸売価格、０．６％高

豚枝肉卸売価格（東京、極上・上加重平均）は、出荷頭数が少なくなる春から夏にかけて上昇基調で推移し、出荷頭数の増加する秋ごろに低下する傾向にある。

令和元年度は、昨年夏の猛暑の影響による出荷頭数減により前半は相場高となったものの、夏場は冷夏により相場が低下した。９月以降は内食需要の高まりや消費者の低価格志向を受け小売店などからの引き合いが高まったことなどから一時的に相場がやや上昇した。この結果、年度平均では１キログラム当たり５２２円（前年度比０．６％高）となった（図１０）。

図１０　豚枝肉の卸売価格（東京）の推移



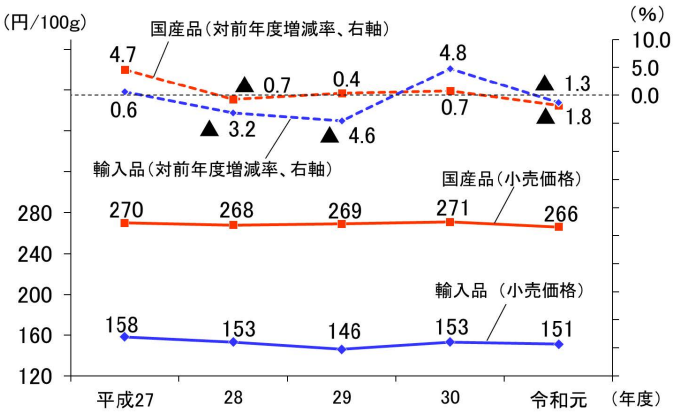
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注１：卸売価格は、極上と上の加重平均。
　２：消費税を含む。
　３：３０年度安定価格については、平成３０年１２月２９日まで適用。

◆小売価格

元年度の小売価格、国産品、輸入品ともに低下

豚肉の小売価格（ロース）について、令和元年度は、国産品は、生産量は増加したものの、１００グラム当たり２６６円と（前年度比１．８％安）とわずかに低下した。輸入品は、国内の輸入品在庫が高水準で推移していたことなどから、同１５１円（同１．３％安）と前年度をわずかに下回った（図１１）。

図１１　豚肉の小売価格（ロース）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。